

日蓮宗では、部落問題の解決を巡って組織された「東京同宗連」に加盟せず、独自に人権委員会をもって、自主的な取り組みを展開してきている。部落問題解決の展望としても、国民大衆的な人権の徹底、一般民主主義的諸課題の打開、そして人権教育の徹底こそが基本的に重要だと考えられるのである。

仏教教育の社会的役割（の根拠）を どのようなところに求めるのか

立正大学教授 仏教学科主任 伊藤 瑞 叡

1. 宗教の社会に対するサイバネティクス・モデル

まず確認しておかなければならないことは、仏教は、宗教としては人文宗教、主義としては倫理的理想主義であり、哲学としては実践哲学である、ということである。

元来、宗教は社会に対して制御する機能をもつ。仏教も宗教である以上、例外ではなく、倫理的正当性としての規範をもち、それは法的規範、社会経済的、政治的な規範までをも制御し、更に社会国家全体を制御するように機能する。

これを日蓮聖人の実践的な思考方法に即して見るならば、宗教である仏教は、二段階三段階に社会国家を制御する特質をもつから、政治経済的な社会国家の根底に存在する規範となって機能する。しかも法華仏教の目的は「浄仏国土」としての立正安国と「一切皆成仏」としての衆生救済にある。法華仏教の機能が目的を達成するには、教・機・時・国・序の五綱の正しい関係を保持しつつ、正法が個人社会・国家社会の根柢に建立・定着せしめられなければならない。そのことによって、仏法が機能し、目的が成就されなければならない。仏教の社会教育の根拠はこの点にあるといえよう。

2、「仏教教育」とは何か

ルソーはその著書『エミール』において、教育とは、自己が自らのために生存する「自然人」という存在を、他人のために生きる「社会人」へと育成することだと述べている。人間の成長は一定の自然秩序に従うものである以上、自然を尊重する教育が大切であることは至極当然であり、教育もこの秩序に応じて変化しなければならない。その中で、まず自然人を作り、その自然人を社会人へと育成することが必要である。

これを仏教に適用して見ると、「自然人」は六道凡夫に、「社会人」は四聖、特に菩薩に照合するであろう。また「教育」は、仏教用語の「教化＝成熟」と同義であり、普遍妥当な道理に基づいて自己が人間として成熟してゆくことを意味する。仏教において、成仏こそ究極的目的ではあるが、仏教教育の目的としては、他人のために生きる（ことが真に自分のために生きる）人間である菩薩を育成することに主眼を置くべきである。

本化の教育は、教菩薩法による教無量菩薩畢竟住一乗であり、別言すると、化導の始終をもってする、種熟脱の三益となる。すなわち、私どもにとっての教育（＝教化）とは、自然（ものところ）の秩序である「妙法」（＝縁起・無自性空・諸法実相・本有妙法）に従って、一切衆生を自行化他する菩薩へと教化することである。

さらに『エミール』では、青年教育において宗教教育（特定の宗教ではなく、人間の自然的感情としての宗教心）が重要であることを明示している。

人間とは本来エゴイストであり、他人を損ない、やがて自分を損なう存在である。これは仏教という増上慢（abhimana）と同義であり、我執の存在、無明の存在である。したがって、自尊心の塊である自己中心的な人間から他愛心を養い、同情心を養うという、すなわち社会人として生きる自行化他の菩薩を育成する上で、宗教教育が必要となる。

では、宗教（的情操）教育とは何か。私どもの宗教的情操教育のポイントは、

究極的には智慧と慈悲の育成にある。人の悲しみを理解する心を養い、聖なるものを仰ぐということにある。

これを目的として行われる仏教教育とは、具体的には古典教育と訓育教育に重点を置きながら、垂範教育をもって、徳育と知育がなされなければならない。

しかし、今日の先進民主主義国では道徳的退廃が著しく、自由主義は宗教的道徳を否定し、ヒューマニタリアニズム（＝人道主義）ではなく、ヒューマンイズム（＝人間中心主義）の道徳に重きを置いている。これは世俗主義の道徳であり、その影響からか、大学生を取り巻く現代社会はアノミー（＝無秩序状態）となり、物質主義あるいは享楽主義が蔓延している。教育機関である大学自体の現状も、組織調整の低迷化、人間関係の陳腐化、研究教育の低俗化等の問題を抱えている。このような状況を矯正し、世俗道徳より宗教による道徳や人道主義による道徳へと導くために、私どもは日蓮聖人の提唱された一妙三秘を内的規範とする、仏教教育を実践する秩序を確立していかなければならない。

3. 三秘を内的規範とした教育方法

本化の仏教の根幹である三秘、すなわち本門の本尊・本門の戒壇・本門の題目は、それぞれ三学の定・戒・慧に対応し、これを実践することで、身・口・意の三業を正しく整え、凡夫をして菩薩へと導くことができる。

ところで、仏教は生涯教育を担うものである。この三秘を応用すると、幼少年期・青少年期・老壮年期の三期にわたって、その実践徳目を提唱することが可能である。すなわち幼少年期は下種教育、青年期は調熟教育、老壮年期には得脱教育という、三益化導を適用して実践していくことが必要となる。

まず幼少年教育における下種教育とは、徳目として端坐修行（＝定＝本尊）・受食作法（＝戒＝戒壇）・合掌礼拝（＝慧＝題目）の三の要事をもって修養することである。この根本徳目を実践することによって、「かたちをつくって、こころをつくる」という幼少年期の教育を導くことができよう。

青少年教育に際しては、立志・立願を教えるべきである。三秘は正直捨権の道理（＝本門の本尊）・懺悔滅罪の戒法（＝本門の戒壇）・知恩報恩の妙行（＝本門の題目）という原理に置き換えることができる。方便・手段を確認し、その究極的な真の目的や当為や真実を追求すること、懺悔滅罪の精神とその行為を忘失しないこと、恩を知り恩に報いる四恩報謝を実践すること、これを教導するべきである。

最後の老壮年教育においては、正しい信仰生活を基盤として、お題目の功德による御守護（一妙）・本尊による御守護（本尊）・経力による御守護（題目）・神力による御守護（戒壇）・御先祖の精霊（を聖霊にすること）による御守護の5つを得ることが大切である。それによって永遠にして清浄なる聖なるもの（本仏）に守護されているという安心（＝解脱）を得ることが重要である。

4、社会の中の仏教教育

社会学でいう社会とは、人間と相即する人間結合・共同一般のことである。それは仏教でいう五陰世間・衆生世間・国土世間の三種世間に対応する。それらの相互依存関係を重視しながら、現実社会における教育の本質が自己教育にあることを確認しなければならない。それは本化仏教の自行化他を实践原則とする立場に対応する。すなわち、自行が自己教育であり、化他が社会教育と相応する。

自行化他を实践原則とする仏教教育とは、自己・家庭・学校の各教育とともに、社会教育の地位と役割を取得し遂行されなければならない。さらに、福祉事業の中にもその地位と役割を取得されなければならない。宗教的行為が社会的行為の一形態であるからである。

仏教教育が、社会に自行化他の教育を期待されているのと同様に、それを担う行為者（大学人・教師・僧侶）にも、義務あるエトス（＝行動様式）が期待されている。すなわち、一定の地位を占めた行為者は、品位ある行動様式をもつ

て、その地位等に見合うように行動することが義務づけられており、私どもはこのような社会的圧力に耐えなければならない。

しかし、仏教行為者はインテリぶった存在、学識徳望なき輩等と見られているのが現実である。よって、改めて仏教教育の行為者として期待される教師像が追求されなければならない。すなわち、仏教行為者は、教師も大学人も、本化の眷属として、本化仏教より信行学を要請され、一般社会より学識徳望を期待されていると自覚しなければならない。信行学が仏教教育の社会的役割の根拠となり、原動力となるからである。

5. 結論

私どもが担う仏教教育は、自行化他の妙法五字を内面的原則とし、四信・五品・五種法師行の規範に基づいて実践することが要請される。現実には、垂範教育によって古典教育・訓育教育を行い、教育する立場にある私どもも、自己自身を教育する己人教育に徹しなければならない。仏教教育は生涯教育であり、一妙三秘の内証の外用化をもってする三益化導が、幼少年・青少年・老壮年の三期に渡って、学校・社会・家庭といった現の場において遂行されなければならない。その究極的目的地は、信と学を重要規範とする自行としての自己教育と、行を重要規範とする化他としての社会教育との両面において、浄仏国土と衆生皆成を達成することである。換言するならば、世界に対する明晰な解釈を与える妙法の秩序を、人間・社会・自然・環境にもたらし定着せしめ、衆生と国土を福德に充ちたものへと引導していくことである。そのために、聖なるものを仰ぎ、尊い人々にあやかりとうとする態度も必要である。かくして畢竟人々の心の中に真の安心を与えることができるであろう。ここに、仏教者の社会的役割を担う教育原理が存在するのではないか。